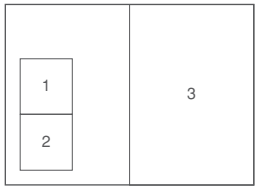
CD 01 011〜013

花丸文-3【はなまるもん】

中国を代表する「明」時代の絢爛豪華な文様

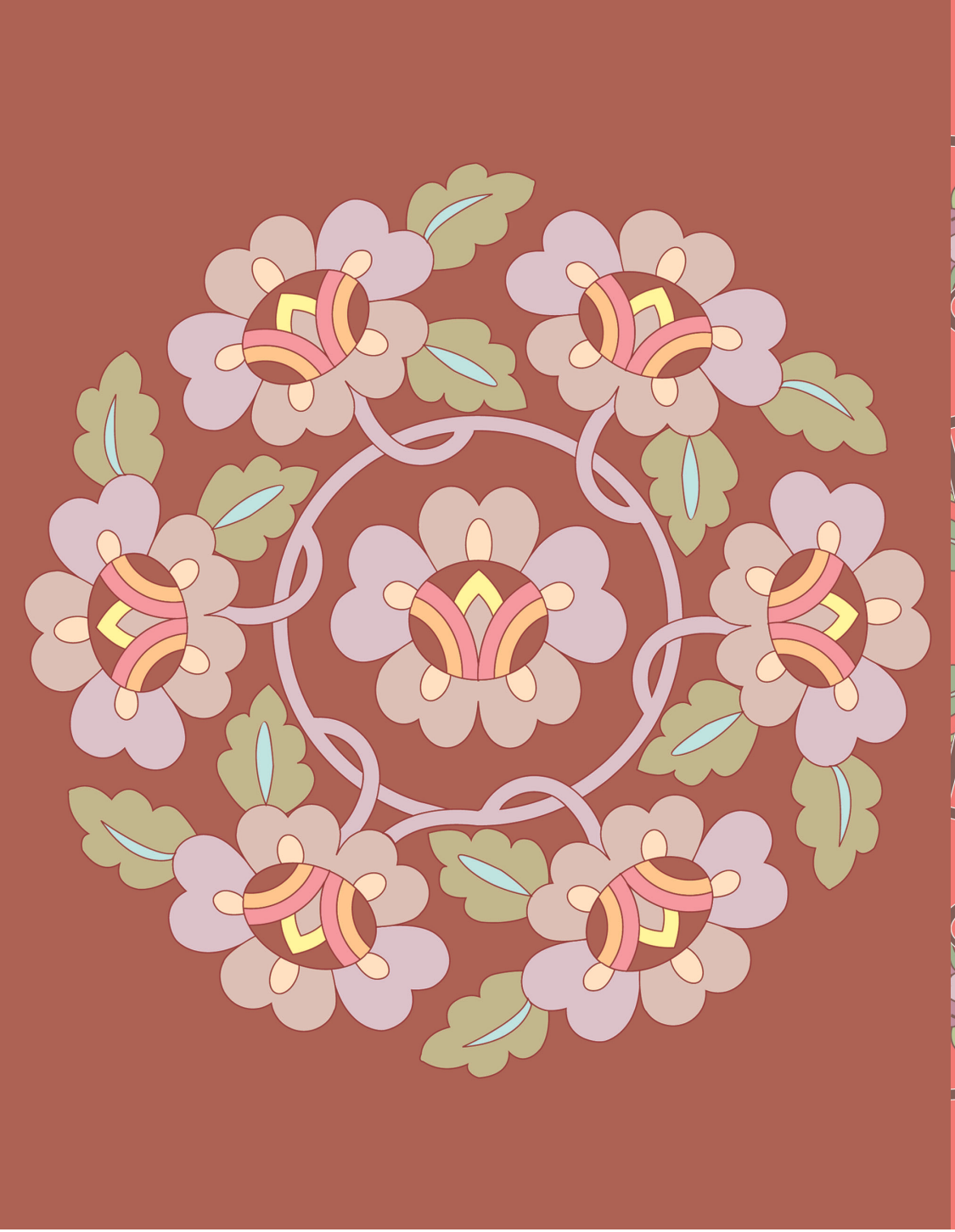
中国の「明代」景泰年間（1450〜56）に最盛期を迎えた陶器は「景泰藍（ちんたいらん）」とよばれます。「景泰藍」の技法は、細い銅の糸で図案を型どり、そのなかに色釉（いろゆう）を流し込んで焼成する七宝焼で、私たち日本人から見ると、もっとも中国らしい美質をもち、色鮮やかに浮き上がるような文様が特徴です。



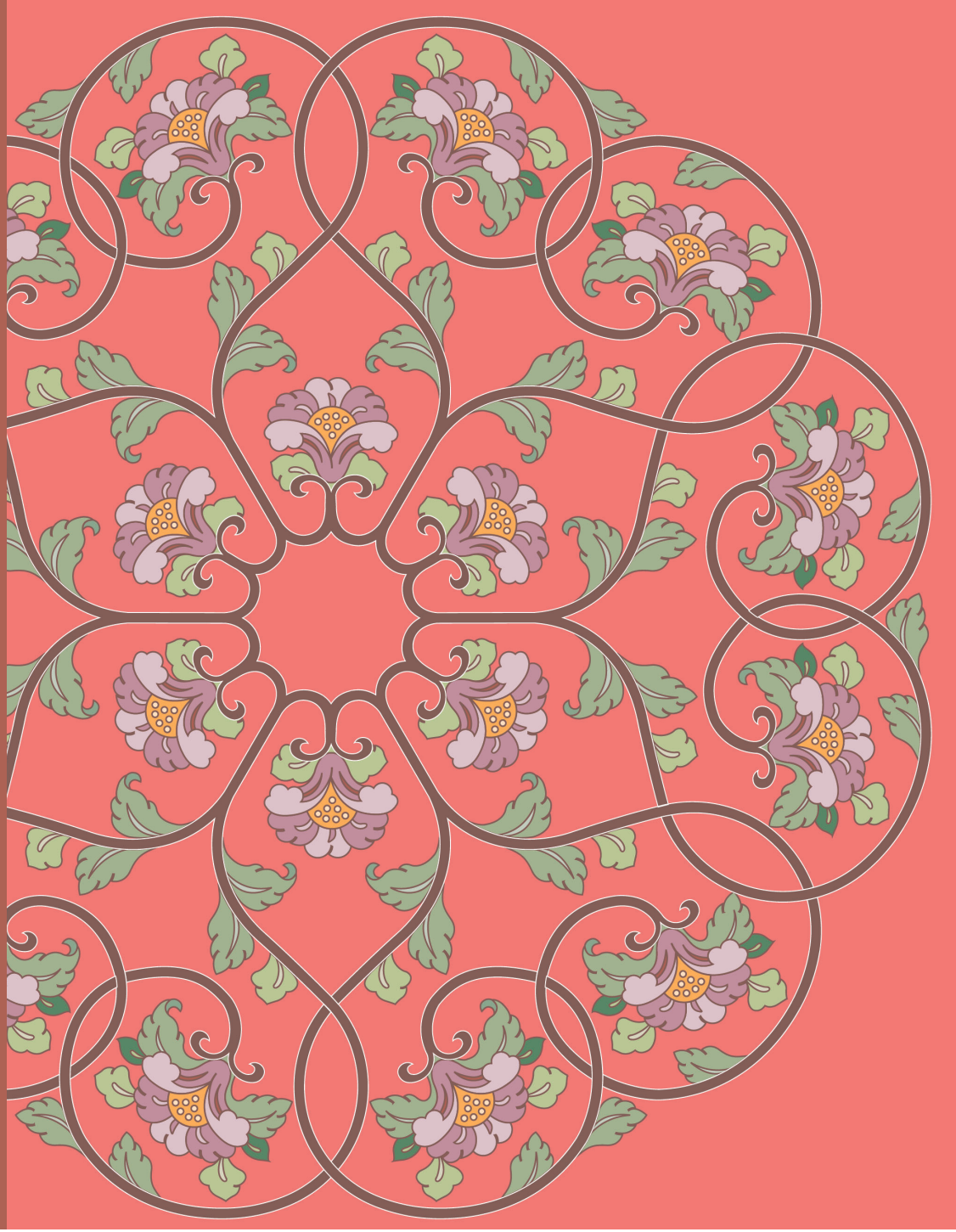
1 牡丹文 盤（ばん） CD 01_011
「景泰藍」特有の文様を枠どる細い銅線が金色に輝き、日本の牡丹文とは趣がかなり異なります。

2 龍蓮文 罐（かん） CD 01_012
龍、蓮の花・葉の唐草模様を組み合わせて、これでもか！といいたい作者の鼻息が聞こえそうです。

3 錦花（きんか）文盒（ごう） CD 01_013
細密技法は中国人のお家芸といわれますが、まさしく、その技法を誇示しているような見事なでき映えです。



■宝相花（ほうそうげ）唐代　CD 01_014　唐時代の花文様は、おおむね連環させるか、左右対称です。この宝相花紋は造形に面白味があります。



■仏像画光背　部分　CD 01_015　「莫高窟」に描かれている仏像の背後の壁に描かれた「光背」の部分です。拡散する後光のイメージが、波形のつるで同心円で描かれ、流麗で柔らかなリズムをもっています。